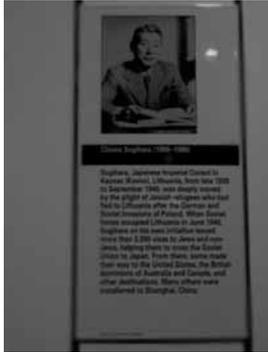


ス室で亡くなっていった人たちが履いていた薄汚れたシューズの山…幸せな生活を送っていたユダヤの人たちが、ヒトラーの台頭によって壁のある「ゲットー」に隔離され、やがては強制的に連行され労働を強いられる。待っているのは…。



説明はすべて英語、けれど写真などの展示物が訴えかけている強烈な声なき声は、心をわしづかみにした。一方で、命を救おうと努力した人々のパネル展示があり、その中に「杉原千畝氏」の写真と功績を見つける。あの戦火の中で、人道の精神を実行された方たち。平和を愛し命の尊さを第一義に考え、自分を見失わなかった人たちである。そのことが学べる大切なコーナーであった。生徒たちは、杉原千畝氏への敬愛の念を深めてくれたと思う。見学後に予定されていたホロコースト体験者のお話は、高齢の講師の方で体調が思わしくないということで急きよ、館長さんらに質問する時間に変更された。このときも数名の生徒が積極的に手をあげ「もっと知りたい」という気持ちを前面に出していた。私からのお礼の言葉は日本語で語らせてもらった。『ホロコースト=大量虐殺、「虐殺」の虐はとても書きにくい漢字である。このような筆の流れを持つ漢字を私は他に知らない。このことは、「人間としてしてはいけないこと



である」と違和感を持つように作られた漢字かもしれない。この施設は、人として何を一番大切にしなければならぬのか、ということを教えてくれている。』その内容を泉さんに通訳してもらい館長さんらに伝えてもらった。

(2) NYグラウンド・ゼロ(爆心地)と国連本部

自由の女神(リバティ島)に向かう前に、三千人近くの命が失われたグラウンド・ゼロ周辺を目の当たりにすることができた。テロの起きた2001年は、生徒たちの生まれた年である。世界貿易センタービルに乗っ取られた二機の旅客機が突っ込み、世界中がテロの脅威に震撼したあの現場。生徒は、そのことを知識として聞いたことがあるが、あまりよく分かっていないようであった。後世の記憶に留めるための努力がそこにもあった。旅客機の残骸を使って作られたオブジェ。痛ましい記憶を再度学ぶための9.11記念博物館も建設されている。過去を未来に生かそうとする国の構えをここでも確認することができた。



そして、最後の見学地となったニューヨーク国連本部。世界の平和維持のための中枢機関。「ここからは、アメリカではありません。」と入り口で泉さん。加盟192か国の国旗と北極圏から見た地球を表した国連旗がなびいていた。黒人差別・銃規制を表したオブジェ。日本から寄贈された平和の鐘もある。大きな建物内の4つの会議場を8か国語が話せるという男性職員にゆっくりした英語で説明してもらった。すべて理解することは難しかったと思うが、それだけの言語が話せる人に会えただけでも大きな勉強になったと思う。国連本部には、国や人種が違って互いの気持ちを理解することができる力を持っている人が当たり前にいるということ。さらに「日本語は勉強中です。」と9か国語目となる日本語で話されたときに生徒からも笑みがこぼれた。ここでの体験も平和な社会を築いていこうとする考えを深めていく上で、本当に貴重な時間であったと思う。



8. 最終日 もろもろ

グラウンド・ゼロ近くの観光船乗り場から、リバティ島へ。自由の女神像の見学。観光船が次第にリバティ島に近づいて行く。どのような場所にどのような姿で立っているのか？小さく見えていたものが、次第に大きくなる。期待も徐々に大きく膨らんでいく。心憎い演出？である。自由の女神がはっきりと大きく見えだすと、多くの観光者たちの写真撮影が始まり、生徒たちもざわめき立ってくる。自由の女神像は、心なしか微笑みを浮かべているかのように見え、左手には独立記念日が刻まれた陶板を持ち、右手は高々とたいまつを掲げている。台座を含めた高さが93m、見上げるその大きさに圧倒されながらも、生徒たちは「本物」に出会えたことで笑顔いっぱいだった。「平和と民主主義の象徴」として世界文化遺産に登録されていることにも納得である。自由の女神像の前だけでなく、ニューヨーク中心部の摩天楼がバックに入る場所でも記念写真を撮ることができた。



昼食は、熱気あふれるチャイナタウンでの中華料理。おいしく楽しい時間であった。そのあとは、エンパイアステートビルへ。展望階へ行くために少し並んで待ったが、時間がかかりかかりそうであったため、夕食後に時間を変更し、ニューヨークの夜景を見せようということになった。夜は、幸いなことにさほど時間をかけずに80階までのエレベーターに乗ることができ、80階からは自力階段コースで86階までたどり着いた。階段を上る足取りは、最終日とは思えないほど。生徒たちは元気であった。



百万ドルの夜景とは、このことだったのか。声にならないほどの美しさ。どこもかしこもキラキラ輝く宝石箱のようである。生徒たちは、あふれる観光客の隙間からうまく前へと移動し、こぼれる宝石箱の景色を目の当たりにした。アメリカ最後の夜の大きなプレゼントだった。